

「個人」という名の環境の崩壊について

坂本 博

1. 環境のスペクトル

昨年私は「環境概念の再考」というタイトルの論文で私なりに「環境」というコトバの意味を明確にすべく努めた。そして一応「主体と状況とを媒介するもの」という環境概念を得ることができた。

すでに述べたように、「媒介するもの」は「媒介者 (mediator)」と「媒体 (medium)」の二つより成る。従って私が得た環境概念は「主体」、「状況 (または条件)」、「媒介者」、「媒体」という四つの項を含んでいる。それは言わば「四項概念」にほかならない。

ところで上に記したように、昨年の論考で私は「媒介するもの」を環境と名づけたが、しかし今は「媒体」だけを環境と呼ぶほうが適切ではないかと思っている。と言うのも媒体は何らかの「もの」として形をなしているが、これに対して媒介者のほうは多くの場合隠されている、仲々とらえがたいからである。

この隠されている媒介者の姿を明らかにすることが私の「環境論 (a philosophy of environment)」の最大の課題ではあるまいかという想いが日毎に強まっているが、それはさておいて、私は改めて「特定の状況に対する特定の主体の媒体」を環境の定義として提示したいと思う。

図で示すなら、右の通りである。すなわち、Sが特定の主体、Oが特定の状況、そしてMが媒体 (= 環境)、Rがその製作者である媒介者にはほかならない。

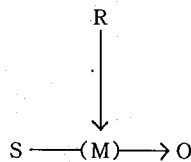


図 1.

ところで昨年私は環境の相対性について論じたことがある。その際私はE.P. オダムの「生物学的スペクトル」を拝借して、これを言わば「環境のスペクトル」として解釈してみた。多分このスペクトルは環境論の体系にとっても環境科学の体系化にとっても有効ではないかと思っているので、ここにそれを次のように書き改めてみたいと思う (図 2)。

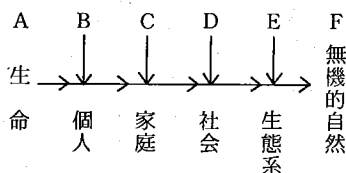


図 2.

これは一応の図式であり、素描にすぎない。その細部、その意味については私にも分らない点が多々あることを白状せねばならない。

例えば、個人は生命の環境であるが、個人という環境を製作した媒介者Bとは何者であろうか。またこの環境はどのような特定の状況に対する媒体なのであろうか。最終的には個人は無機的自然に対する生命の環境であることは間違いないが――。

他方、このスペクトルから明らかに見える部分もある。例えば、生態学というのは生態系と無機的自然との関係を研究対象とし、環境科学は社会と生態系との関係を研究対象としているように私の目には見えるのである。

そのことを環境科学について確かめてみるなら、環境科学者にとって環境問題とは生態系と社会との対立抗争のことであるらしい。すなわち、松原治郎氏によると、「自然系なり社会系なりの循環体系が既存の秩序を失って、それが人間生活に対してマイナスにはね返っている点」²⁾が今日の環境問題であり、同様にして石原健二氏も次のように書いている、――「(人間社会系が)自然系、生物生態系と背反することがときどきおこり、そして最近とくに激しくなっている。ここに環境問題が発生する」²⁾。

では一体どのような源からこのような環境問題が発生するのだろうか。石原氏は次のように付け加えている。

「人間社会系は、極端につきつめると、人間の欲望に出発する。今日、公害と言われる環境問題は、むしろ人間社会のなかの人間相互の欲望の相こくであるといった方が適切であるかも知れない」³⁾。すなわち氏の視線は図 2 の環境スペクトルの「個人」の所まで立ち帰っているわけである。

同様にして同僚の環境科学者松田松二氏は私がかつて「自然破壊は人間性の崩壊の道連れにはほかならないのかも知れない」と語った時、「それが環境科学の原点である」と言って賛同の意を表明され、私に人間性の崩壊の詳細な分析を要請されたことがある。

人文科学者としての私にできることは「個人」という名の環境がどのようにして崩壊するかを明らかにすることだけである。生命の環境である個人の崩壊を私は以下の五つの節で (1) 永生への激しい執着、(2) プライド、(3) 欲望の三つをテーマにしなが、分析してみたいと思っている。

2. 死について

昨年論文で私は生物個体もまた一つの環境系であることを明らかにすることができたと思っている。個体が備えている様々な器官や組織はすべて特定の状況に対する媒体にほかならないのである。そして個体はこれらの媒体の複合体であるから、それは一つの環境系であり、その主体としては「生命」を想定せざるをえないのである。さて、今は人間について「個人」という名の環境がどのようにして崩壊するのか、検討してみよう。

個人の崩壊、それは死であろうか。個人は一つの環境系なのだから、その死はたしかに環境の崩壊であることに間違いはない。では私たち個人の死はどのようにしてもたらされるのであろうか。

私は年をとるにつれて、今までよりもひんぱんに死について考えるようになった。一体死とは何だろうか。私たちは何故死ぬのであろうか。人間だけではなく、他の動物たちも皆死ぬ。植物も死んでいる。バクテリアやウィルスも死んでゆくのだろうか。私には分からない。

ともあれ、これまでのところほとんどすべての生物は死を免れることができなかった。だから私もやがて死ぬ運命にある。だが死にたくないという気持は依然としてくすぶっている。

私は自分がやがて死ぬということを疑わない。それは確かな事実である。ただし、死が事実だとしても、それが運命なのかどうか、この点に私の疑いが引かかる。死が運命であるなら、あきらめをつく。「あきらめる」とは「明らかに見る」ことらしいから、死が運命であることを明らかに見ることができれば、私もあきらめて、「死にたくない」という気持を消すほうに力を注ぐこともできよう。だが、果して死は運命であり必然であるのだろうか。

私の先入見では、死について最も良く教えることができるのは宗教家だということになっている。これまで私は未だ若いつもりでいたから、死について宗教家から何かを教えてもらわねば、という強い意欲をもち合わせてはいなかった。

今さら気を急がせても始まらないが、これまで小耳にはさんだ宗教家の説教のいくつかを想い出してみると、彼らは「永遠の命」を強調していたように思える。もちろん、肉体の命ではなく、魂の永生のことである。だが、これは私の問いかけに対する答えにはならない。

私は「何故私のこの肉体が減るのか。それは運命と必然なのか。」と問いかけているのである。

生物学者はこの問いかけに答えることができるだろうか。私の知る限りでは、これに対する生物学者の意見は二つに分かれている。一つは「エラー蓄積説」であり、他は「プログラム説」であるという。

前者によると、「細胞内の重要な代謝をつかさどる DNA → RNA → 酵素という情報の流れにエラーが生じ、そのエラーが酵素から DNA に何らかの形でフィードバックされて蓄積するために老化がおこる」⁴⁾、従って死に至るというわけである。素人目にはよく分からないが、これでは死は運命でもなければ必然でもない。

すべての人が「死にたくない」と思っているのだから、エラーが蓄積しないような薬の開発を願わない者はいないだろう。

他方、プログラム説によると、老化の（故に死の）遺伝情報はすでに DNA の中に組み込まれているという⁵⁾。もしそうなら死は運命であり必然にほかならない。

以上の二説を比べてみると、素人目にもプログラム説のほうが筋が通っているように見える。この説の主張者がどういう根拠からそのように主張しているのか私には不明であるが、私なら死すべき生物が備えている生殖の仕組みを根拠として挙げるだろう。子供を産むことが必然であるなら、その親が死すべきことは必然であり、親となりうるすべての生物にとって死は運命でなければならない。そうでなかったら、一体何のための生殖であり、何のための子育てなのだろう。

このようにして私は死が運命であることを知ることができる。だが未だ分からないことが残っている。

生物個体には自己を維持して生き延びるためのあらゆる環境が備わっている。強い外敵から逃れるための迷彩や擬態、あるいは長い首、敏感な鼻、速い足、固い甲羅など枚挙にいとまがない。しかし、彼を滅ぼす最も確実な刃が彼の DNA の中にプログラムされているのである。

これは果して矛盾であろうか。もし彼に生殖と子育ての仕組みがプログラムされていなければ、たしかにそれは矛盾である。だが、そのようなプログラムが存在する以上、死もまた環境なのである。死もまた生物個体という環境系の中の一つの環境にほかならないのである。

だから私は先ほどの思慮に欠けたコトバを取り消さねばならない。「個人の死はたしかに環境の崩壊であることに間違いはない」という一言は間違いである。

個体という生命の環境系はけっして死によって崩壊するのではない。むしろ逆に成就するのである。

私の主体である生命がどういうわけで私の DNA の中に環境としての死をプログラムしたのか私にははっきりとは分からない。だが、ぼんやりとなら分かる。

私はかつて美しいバラの花を見ては感動したことがある。青い空に浮かぶ白い雲を眺め、さわやかな風に吹かれて生きる喜びを味わったことがある。

この喜びや感動は少数の個人が独占してよいものだろうか。しかも年をとるにつれて、そのような感情は新鮮な味を失って行く。もし私が不死であるなら、美と生に

対する感情は限りなく鈍磨して、最後には「死に果てる」にちがいない。そのような歎きを私はシモヌ・ド・ボーヴォワールの小説「人はすべて死ぬ」で読んだことがある。

私の子供たちや、またその子供たちや…、要するに限りなく多くの人間が絶え間なく生きることの喜びを味わうことができるためには私が死ななければならないわけである。そしてこのことを明らかに見るなら、私にとって死は恐怖でも不安でもない。想いを後から来るこれらの子供たちやその他の多くの人々に移してみるなら、私にとって死は逆に喜びでさえあるだろう。

では個人という名の環境系を崩壊させるものはどこからも来ないのだろうか。いや、そうではない。これまでの考察から明らかなように、「死にたくない。永遠に生き延びたい」という生への激しい執着こそ環境としての個人を崩壊させるものである。

環境概念に従って考えるなら、或る環境が崩壊するということは単に一つの媒体が消滅するというだけではない。むしろそれが環境でありながら、環境としては機能せず、あたかも環境の主体であるかのように振舞うということである。

個人が環境としての機能を喪失するという個人にとって死は不可解であるということは表裏一体をなしている。ホメロスの神々は人間に対しては「汝ら死すべき者共よ」と呼びかけるのが常であった。古代の賢者は「汝ら死すべきことを忘れるな」と警告しつづけた。しかし彼らは死の事実を人々につきつづけただけであって、死の意味を説明することはできなかつたのである。

死の意味が不可解で不合理であるなら、個人は来たるべき若い世代への愛と責任を失いかねないし、自分の世代だけで緑と資源を消費する罪を感じないだろう。

3. 内なる神について

環境としての個体を崩壊させる「永生への激しい執着」は人間だけではなく、どのような生物にも見られるはずである。もちろん、他の生物はその執着を実現することができるような手段を知らない。しかし人間は知性の助けを借りて、空を飛ぶとか月へ行くなど実現不可能に見えたことさえ実現したのだから、未来においてDNAの中の「死のプログラム」を削り落として、生殖の仕組みを単に快樂の機能としてのみ利用するようになるかも知れない。

それは未だSFにすぎないが、環境としての個体を崩壊させるもう一つの要因に目を向けるなら、これはどうやら人間に固有のものであるように思える。もっとも、私は他の生物については良く知らないので今のところ断言はできないが、少なくとも人間についてはその要因が非常に顕著であると言うことはできる。そしてその名は

「プライド」；すなわち「傲慢」にはかならない。

人間は誠に傲慢な動物である。私たち人間は個人としては常に他の個人よりも優れていたいという強い欲求を抱いている。現実には他人よりも秀でていることが明らかな場合、それはこの上もない満足を私たちにもたらす。そして私たちは他人を「馬鹿にする」のである。逆に、私たちより優れた人が居るなら、私たちは口惜しがり、そして馬鹿にされないように虚勢を張ったり、相手のアヲを探し出しては、相手を引きずり落とそうとする。

同様に、私たちは民族としても他の民族に対して傲慢である。さらに私たちは「ヒト」という種としても他の生物に対して限りなく傲慢なのである。一体この傲慢とは何だろうか。

傲慢を分析する手がかりは次の一点に在る。すなわち、それは「或る人が傲慢であるかどうかは彼の現実には依存しない」ということである。

他の人よりも容姿や才能や、また地位や財産や、あるいは学識や名声において優れている人が傲慢であるなら、それは分かる。しかしながら、そうではない人もまた劣らず傲慢であり、時にはいっそう傲慢である。

その生活様式が極めて原始的であり、その所有物が二、三の土器と弓矢と堀立小屋にすぎないような民族が「誇り高き民族」であるというルポルタージュを読むと、私は首をかしげたくるのである。そして彼らのプライドは一体何に依存しているのだろうかという問いかけを禁じえない。

個人についても同様である。彼の現実には誠に卑小であり悲惨であるのに、そのプライドだけは人並みか、それ以上になっている。

だからプライドは現実には依存しない。それは言わば a priori (先天的) である。そして「良識はこの世で最も公平に配分されているものである」というデカルトの言い方をもじるなら、私は「プライドはこの世で最も公平に配分されているものである」と主張したい。ではこのようなプライドとは一体何であろうか。

しばらく考えているうちに、私は次のような解釈に達した。すなわち、「私」というものはどうやら二重になっているようである。一つは「現実の私」である。

この私は或る特定の年月日に特定の場所で生まれ、特定の人間を親として与えられ、特定の小学校、中学校、高校でしかじかの成績を収め、特定の大学で特定の専攻に励み、そして特定の社会的地位を占めている。その他。この私は他人の目にも良く見通せるエゴなのである。

ところが、もう一つ別のエゴが存在する。私はこれを「観念の私」と呼ぶことにしよう。それは「現にそう在る私」ではなくて、「かく在るべき私」なのである。

私たちは例外なくさまざまな願望を抱き、それを頭の

中であれこれと描き出す。或る者はノーベル賞の夢を見るだろう。或る者は絶世の美女であつたらと溜息をもらすであろう。このような「観念の私」は私にだけ見えて、他人には見えないエゴである。

では私たちはこれら二つのエゴのうちどちらの方を「本当の私」と見なしているのだろうか。

少なくとも私自身に関する限り、私は観念のエゴのほうを「本当の私」と見なしていると、卒直に白状しておこう。そして他の人々もまた私と同じではあるまいかという疑いを私はぬぐい去ることができない。

なぜなら、もしそうでなかったら人々はどのようにして「一体私は何者だろうか」などと問いかけるのか。もし人々が「現実の私」について「何者か？」と問いかけているなら、これは殆んど問いかけるに値しない。自分自身に関する詳細な履歴書を作成するだけで、すでに事は足りるのである。

人が「私は何者か？」と問いかけるとき、その「私」とは「観念の私」にはかならない。そして彼の問いかけが切実であるなら、それは彼が観念のエゴを彼の真実のエゴとみなしている証拠になるだろう。

例外はあるかも知れない。だが、ほとんどすべての人間が観念のエゴを真実のエゴと見なしているということ私は疑わない。では現実のエゴは私にとって一体何だろうか。

それは何かの間違ったものである。現実のエゴとは偶然によってのみそうなっているのであり、そして多くの場合それはほとんどない間違いにはかならないのである。

以上の考察から判明するように、「観念の私」を「本当の私」とみなす所からプライドは生まれる。そして、それはまさに観念なのだから、どのようにでも飾り立てることができるだろう。

現実のエゴがどのように卑小であっても、それは観念のエゴを偉大の極みにまで持ち上げるのに何の障害にもならない。むしろ現実のエゴが卑小であればあるほど、少なくとも観念においては、このとんでもない間違いを訂正しておかねばならないという想いはいっそう強まるわけである。

このようにして観念のエゴはいとも易々と完全と偉大と高貴の極みにまで高まる。明らかにこれらは神の属性なのである。だから私は観念のエゴを「内なる神」と呼ぶことにしよう。

他人に対する時、私の目に見えるのは彼の「現実の私」だけである。彼の内なる神は私の目には見えない。ところが私には私の内なる神はよく見える。そして私はできる限り私の「現実の私」を見ようとはしない。それは何かの間違いであり、しかも「本当の私」ではないのだから、見る必要もないのである。

こうして常に私は私の内なる神の立場から他人の現実を見下して、他人を評価する。これを傲慢というなら、他人もまた同じようにして私を見下しているのだから、私たちは互に傲慢なのである。

それはともかくとして、このような内なる神が環境としての私を崩壊せしめる。なぜなら私は神として絶対者なのである。従って私は環境の絶対的な主体でなければならない。私が環境として何か他の絶対者の手段であり道具であり、あるいは器にすぎないということに対して私の内なる神は我慢できないのである。

すでに昔から宗教家や賢者たちは人々の内なる神を打ち砕くための戦いを始めていた。

古代ギリシアのデルポイ神殿には神の言葉として「汝自らを知れ」が刻まれていたという。それは人間は死すべきものであること、従って神ではないことを弁えよという意味である。それは人間の「ヒュプリス（傲慢）」に対する警告であった。

キリスト教によるなら、神が人間を造ったのは人間をして神と神の業を讃美させるためであった。そしてキリスト教の一つの派は「人間は神の器である」と言い、他の派は人間を神の道具とみなしたほどである。

外なる神を信じないものだけを無神論者と呼ぶべきではないであろう。外なる神は信じないにしても、内なる神を信じているなら、彼がどうして無神論者でありえようか。

「人間と人間の神とは一つである。（…）神は人間の内面があらわになったものであり、人間の自己がいろいろあらわされたものである」⁶⁾と書いたフォイエルバッハにとって、神に対する信仰は人間の自己崇拜にすぎなかった。

もしフォイエルバッハが何らかの真実を語っているとすれば、それは人間が神として外に投影できるような内なる神を所有しているという点を明らかにしたことである。そしてそれは彼にとっては人間の精神であり魂であった。これに対してそれは私にとっては現実に対応しない空虚なプライドにはかならないのである。

フォイエルバッハに対する私の疑問を述べるなら、それは「何故人は自己の内なる精神と魂を外に映し出して、これを崇拜しなければならないのだろうか」という点に在る。なるほど、時として他人をほめたたえることが自分自身をほめたたえるにすぎないというそんなほめ方もある。だが、神を信じ、神の前にひれ伏して、罪の許しを求める人の姿にはそういう愚な所はひとかけらも見られないのである。

さらにまた、私は未だ人間が確かに所有している精神と魂については多くを知らないが、少なくとも私たちの精神に偉大な所があるとすれば、それは自分自身が無

知であることを知り、自分自身が愚かであることを弁えることができるという所において成り立つ偉大さである。それは「無知の知」に生きたソクラテス的な偉大さであり、また自己の悲慘と卑小を見つめたパスカルの偉大さにほかならない。要するに、このような「自己否定」の偉大さと人々が「神」と呼ぶものの偉大さとは別物なのである。

その上、外なる神が内なる神の外化にすぎないとしても、この外化は内なる神を追放し、内なる神を打ち砕くという効果をもつ。それはけっして人間の自己崇拜をもたらさない。

私自身について語るなら、かねがね私は私自身の苦しみのは半分は私のプライドに端を発しているにちがいないと考えて来た。プライドによって私は他人の現実を評価し、逆に他人もまたプライドによって私の現実を評価するものだから、私と他人との間に成り立っているのは、「馬鹿にする——される」という傲慢の関係だけであって、相互の現実を踏まえた上での良き人間関係——要するに、これこそ「幸福」と言われるものの実体であるが、そのような人間関係ではなかった。

このようにして内なる神は苦しみでこそあれ、けっして救いにはならない。だから私は内なる神を打ち砕くためには、外なる神が幻影にすぎないとしても、そのことは忘れ、あたかもそれが私とは別の実体であるかのように信じ込んで、これを崇拜する必要があるとさえ考えている。だが幸にして私は未だ外なる神が幻影にすぎないと断定する根拠を知らないのである。フォイエルバッハの論法がそのような根拠にはならないことは先ほど示したばかりである。

ともあれ、「幸福」という名の個人間の良き関係を破壊し、「平和」という名の国家間の良き関係を破壊しているのは私たちの内なる神々の仕業である。それだけではなく、ヒトと他の動植物との間の良き関係、「共存」をも破壊しているのは同じ神なのである。

一体このような神はどこからやって来たのだろうか。次節で取り扱う欲望の分析が多少なりともヒントを与えてくれるかも知れない。

4. 欲望について

先ほど紹介したように、石原健二氏は環境問題を「極端につきつめる」と、「人間相互の欲望の相こく」に突き当たると言う。一体「欲望の相こく」とは何であるのか、氏の説明が短かすぎるので、私には良く呑み込めないのである。それでも、人間の欲望が生産活動を活発にし、その規模を拡大したために公害が発生し、自然生態系を破壊しているという現状は私にも良く見える。だが、人間の欲望とは一体何であろうか。それは一体どこからやって来るのだろうか。またそれは環境としての個人を

崩壊せしめる第三の要因になっているのだろうか。「極端につきつめる」というのが環境論の仕事だから、この節では私は欲望の分析を試みることにしよう。

欲望がどんなものか、私たちはすでに体験的には知っている。例えば、美食や大食は欲望の一つである。さらに、美しい着物が欲しい、豪壮な邸宅に住みたい、そして立身出世をしたいなどというのも欲望に属する。そしてこのような欲望には「キリがない」のである。

以上から分かるように、欲望とは人間が「必要以上」のものを手に入れようと望むことであり、そしてこの「以上」には上限がないということである。一体このような欲望はどこからやって来たのであろうか。

私たち人間が生物として自己と種を維持するために必要なものはそう多くはない。衣・食・住・性・群居の五つの条件を充足させればよいのだから、ファッション、美食、大食、豪邸、etc. は必要ではないわけである。

もし上の条件を「欲求」と名づけるなら、私はこれを「欲望」から区別しておかねばならないと考える。

一般の人々はこの区別を十分には知らない。例えば、「自然保護ではメシが喰えない」という言い方を耳にするが、その意味する所は「飢え死にする」ではなく、本当は「人並みに欲望が充足できない」ということである。心理学の専門家さえも欲求と欲望を混同しているのである。

たしかに、多くの場合、欲求の対象と欲望の対象は重なっている。例えば、食という必要を充たすための食物は同時に美食の対象であり、衣という必要を充たすための着物は同時にファッションの対象である。だから人々は欲求と欲望の違いはせいぜい「量」の違いであり、しかもその違いの境目は明確ではないのだから、両者を特別に区別する必要はないと思っているのであろう。

しかしながら必ずしもそうではない。それは欲望が欲求と矛盾するケースがしばしば見られるからである。例えば、美食や大食は健康を破壊するのである。コーヒーやコーラ、酒やタバコについても同じことが言えるだろう。

欲求の目的は明確である。それは個体という名の環境系（これを生理的環境系と名づけてもよい）を維持するためである。しかし欲望の目的はそうではない。そして欲望が目的としているものは至極アイマイである。だが少なくとも、欲望がしばしば生理的環境系を破壊してしまうということは明白である。たとえそれが必ずしも直接的には生理的環境系を破壊しないとしても、欲望を充足させるための工業生産が大気や水質を汚染することによって人々の健康を危機に陥れる時、欲望は間接的に生理的環境系を崩壊せしめるわけである。欲求の場合にはこういう自己矛盾は起こらない。

たしかに、欲望による生理的環境系の破壊は自己矛盾である。なぜなら、たとえそれが外部からの刺激と操作によって肥大させられたとしても、欲望は私たちの内部に巣を作っているからである。一体このような欲望とは何だろうか。

以下私は欲望の本質を洞察すべく努めたいと思う。そしてそのための手がかりとして「退屈」というものを吟味しよう。

私たち人間はどうやら退屈というものに耐えることができない動物であるらしい。

例えば、今日は休日だとしよう。私はすべての義務から解放されて、完全に自由であると仮定しよう。もちろん、私は先ほど食事をすませたばかりであり、室温も適当である。陽光が窓からさし込んでいて、誠に快適な午後である。さて、このようにしてすべての欲求が充たされている場合、私は何をしようか。

もちろん、何かをする必要はない。何もしないで、ゴロリと横になることにしよう。眠くなると有り難いが、困ったことに少しも眠くはない。私は段々退屈を感じ始める。

そこで、喉は渴いていないのに、コーヒーを呑む。空腹でもないのに、駄菓子を食べる。面白くもないテレビ番組を見る。あるいは本を取り出す。あるいはドライブに出かける。あるいは友人を訪問する。ところが、ガラス鉢の中の金魚は退屈など知らないらしく、ひねもすゆったりと泳いでいるのである。

誰もが体験している以上のような例から分かるように、私たちは退屈に耐えることができない。退屈は私たちにとっては苦痛に等しい。そこで私たちはこの苦痛から逃れるために何かを、何か面白いことをやらなければ収まらないのである。なぜそうなるのだろうか。

退屈を覚える時、人は何か後から押されているように感じないだろうか。何もする必要がないのに、何かをするように後から押して来る力を人は感じないだろうか。もし感じたとするなら、この力、このエネルギーが退屈を苦痛に変え、私たちに閑居を許さない張本人なのである。私はこの力を「背後からの力」と呼ぶことにしよう。そしてこのような力を仮定するなら、欲望が何であるかがうまく説明できることを示したいと思う。

背後からの力はその名の示すとおりに後から押す力であって、前から引っ張る力ではない。つまり、それは私たちが無為にとどまることを許さず、何かをするように強いる力であるが、しかし何をなすべきかを指示しない力である。たとえてみるなら、それは自動車の車輪を回転させる駆動力ではあるが、車の進む方向を決定するためのハンドルを制御する力ではないと言えよう。

しかも、どうやらこの力は非常に大きなエネルギーを

持っているらしい。一時的ならこの力を阻止したり抑圧したりすることもできるが、しかしやがては溢れ出し、あるいは爆発してしまう。従って「はけ口」が必要なのである。

さまざまな「はけ口」が考えられる。しかし通常このような「はけ口」として使用されているのが「欲求」である。だから欲求の対象へ向かって流れ込んで行く背後からの力がまさに「欲望」と呼ばれているものにほかならない。

欲求は生物の個体にとっては必要である。そして自然は欲求の充足を確実にするために、それに快感を添えている。そしてこの快感が背後からの力を欲求の対象へ引き付ける力になっているのである。

帝制ローマの貴族たちは美食家であり、大食漢であった。彼らは山海の珍味をたらふく食べた後、これを吐き出して胃袋を空にし、そこで再びご馳走を食べ始めたという。彼らにとって食べることは生理的環境を維持する必要のためではなく、背後からの力を吐き出すためであった。

人間や他の高等動物の脳の一部には快感中枢というものがあるらしい。これに電極を挿し込んで、外部からこれを刺激できるようにすると、ハツカネズミなどの実験動物は食べることも眠ることも忘れて、ただひたすら自分の脳に突きささっている電極に電流を送りつけ、そして最後には衰弱して死に到るという。欲望というものは快感中枢に対する間接的な電極のようなものである。

もちろん、背後からの力は食の対象だけを目標にしてこの中へ流れ込むだけではなく、衣の対象、住の対象、あるいは性の対象を欲求から横取りして、これらを欲望に変えてしまうのである。

現代社会における農業生産、水産、工業生産、サービス等の各種生産のうち欲望を充足するための生産はどの程度の割合をなしているのだろうか。これを計算する方法はないものだろうか。

多分、先進国におけるその割合は大変大きいだろうし、開発途上国においてはりに近いが、あるいはマイナスの場合もあるだろう。

ともあれ、現代の環境破壊が欲望によるものであることは間違いない。人間が、いや特定の国の人間が欲望を充足するために生産の規模を拡大して行くなら、レバーを押しつづけるハツカネズミのように、地球をすみかとする全ての生物はいずれ死に到るだろう。欲望をなんとかする方法はないものだろうか。

5. 気晴らしについて

欲望というものが背後からの力と欲求との結合であることが分かっている以上、欲望をなんとかする方法を見つけることは困難ではないだろう。その方法とは背後か

らの力を欲求の対象から切りはなして——少なくとも、できる限り切りはなして——、他へそらしてしまうことである。一応これを図で示しておこう(図3)。

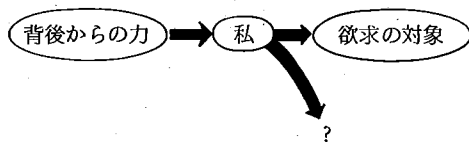


図3.

では「どこえ？」背後からの力をそらせばよいだろうか。これに対して私が頭を悩ます必要はないようである。すでに人類の長い文化史の過程で解答が示されているからである。そして、それは欲望を悪とみなす宗教家や道徳家によって発見されたものでないことは注目に値する。彼らのもっぱら欲望を抑圧する禁欲の道しか知らなかったからである。

背後からの力を他にに向けてそらす方法を発見したのは、順不同であるが、王侯・貴族と金持である。彼らは十二分に欲望を満足させた後でも未だタップリと余っている背後からの力を消費するために、これを乗馬や狩りやゴルフなどの「スポーツ」に向けたのである。彼らにとっては戦争と侵略もまたスポーツにほかならなかったのである。

ところで、この種のスポーツは金持の発明だから金がかかる。資源を浪費する。自然を破壊する。ところが、今日では生産力の向上によって大多数の人々が金持になった。そして以前は金持が独占していたこの種のスポーツを多くの庶民がやるようになったのである。その結果、資源の浪費、自然破壊は加速度的に進行している。

次に、背後からの力を他にそらす道を発見したのは子供たちである。彼らは美食、美衣、豪邸などには無関心である。だから彼らを押す背後からの力は欲求へは向かわない。それはすべて「遊び」のエネルギーになっているのである。

そして第三に貧乏人もまた一役買うことができた。彼らは金持のように欲望を満たすこともスポーツを楽しむこともできないから、緑台将棋やヘボ基などの「ゲーム」や井戸端会議などの「おしゃべり」で背後からの力を消費したわけである。

さて以上のような「スポーツ」、「遊び」、「ゲーム」、「おしゃべり」などを一括して「気晴らし」と呼ぶことにしよう。これに対応するフランス語は *divertissement* であり、その本来の意味は「そらすこと」だからである。

このようにして、ともかくも気晴らしによって背後からの力を欲求の対象から引きはなすことができる。ただ

し引きはなし方が問題となるだろう。王侯・貴族・金持がやるような気晴らしは欲望の弊害を解決する役には立たないからである。だから「良い気晴らし」の条件を求めなければならない。

そのような条件の第一は「面白くて飽きない」ということである。なにしろ欲望は快感によって欲求の方へ引き付けられているのであるから、背後からの力を欲求の対象から引きはなすためには、快感を凌ぐような面白さが気晴らしには備わっていなければならないのである。

「面白くて飽きない」という条件を「容量が大きい」と表現してもよいだろう。なぜなら人間を押している背後からの力は大変大きいエネルギーをもっているから、これをとどこおりなくドンドン吸収できるほどの容量をもっているなら、それは「面白くて飽きない」気晴らしであり、快感に優るからである。

快感中枢に電極を挿し込めばともかくとして、舌とか喉とか胃袋とか皮膚などの感覚器官によって間接的に中枢を刺激する場合には限度がある。胃袋の容量には限りがあるから、ローマの貴族は食べたものを吐き出さなければならなかったわけである。他方、イギリスの貴族サンドウィッチ伯はポーカーに熱中した揚句、正式の食卓を嫌って、例の軽食サンドイッチで済ませたという。

気晴らしの中で容量が大きいのは、私の見るところでは、ゲームである。殊に囲碁がそうである。囲碁ファンと将棋ファンは互に我田引水で自分のやっているゲームの方が面白いと主張するが、両方やってみて、私はやはり囲碁の方が面白いという主張に加担したい。それは当然であって、一方のマス目は 19×19 であるが、他方は 9×9 にすぎないからである。マス目の多い方が変化が多く、容量も大きいはずである。

さて、第二の条件として私は「コストが安い」ことを要求したい。これは欲望の弊害、すなわち大量消費を防ぐことが「良い」気晴らしの条件となる以上当然である。

「おしゃべり」は安くつく。お茶と駄菓子さえあれば十分である。「遊び」も「ゲーム」も大してコストはかからない。他方、「スポーツ」の中には金を喰うものがある。ゴルフがそうであろう。

そして第三の条件として「有意義である」が備わっているなら、これに越したことはない。しかしながら、具合の悪いことには、どの気晴らしもこの条件を満たすことができないようである。

例えば、囲碁は狭い磐上に交互に白石と黒石を並べて、陣地を囲みとっているだけの話である。このゲームに関心をもたない人から見ると、全くバカげた時間潰しにすぎないのである。

テニスについても同じことが言えるだろう。それはボールが右から左へ、左から右へと打ち返されているだけ

のことである。

もちろん、第三の条件が欠けているにしても、第一と第二の条件さえ備わっているなら、気晴らしには十分な存在理由がある。それはもうそれだけで欲望を何とかすることができるからである。

しかしながら、上記の三番目の条件を要求してはいけないという理由は何もない。三つの条件を満たすものがあるとすると、一体それは何であろうか(図4)。

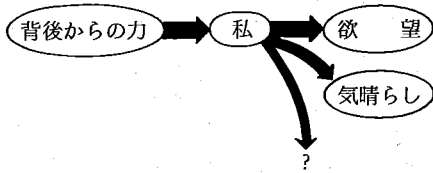


図4.

この場合でも私は特別に頭を悩ませる必要はない。私は私自身が今何をやっているかを振り返ってみればよいからである。

では問いかけてみよう、「私は今退屈だろうか」。そうではない。「私の今の関心は欲望の充足だろうか」。これも否である。

さらに問いかけてみよう、「今私がやっているのは何か面白いことだろうか」。それは間違いのない所である。なにしろ私は数週間前からこの原稿を書きつづけているが、今だに飽きが来ないのだから。では「今私がやっているのはコストが安いものであるかどうか」。このために私が消費しているのはシャープ・ペンシルの芯数本と、今の所8枚の原稿用紙だけである——もっとも、5, 6枚は書きつぶしてしまったが。

「ところで私の今の仕事は有意義と言えるだろうか」。内容については読者の判断にゆだねることにして、私が取り扱っているテーマについてのみ言うなら、これが極めて重要なテーマであることを私は疑わない。

「一言で言うなら、一体私は今何をやっているのだろうか」。それは研究である。学問と言ってもよい。

研究者であるなら誰もが知っているように、研究には限りがない。一つの問題を解決すると、すぐに次の問題が現われる。頑張ってこれを解決すると、また別の問題が出て来る。以下同様である。まさに研究は背後からの力に対する無限大の容量をもっているのである。

他方、芸術についても同じことが言えるだろう。多分、すべての芸術家にとっては彼のどの作品も未完成なのだろう。もっとも私のような素人にとっては、例えば、ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」のどこが未だ完成されてい

ないのか皆目見当もつかないが——。たしかに、芸術は長く、人生は短し、である。こうして研究・学問と同様に、芸術もまた背後からの力に対する無限大の容量をもっているのである。

さて、環境論へ立ち帰るなら、欲望が個人という名の環境を崩壊せしめることは間違いない。だが、未だ分からないことがある。それは背後からの力の正体である。一体これはどういうものだろうか。私は次の一章をこの力の究明に当てたいと思う。

6. 背後からの力について

この力はその名が示すように「背後から」私を押しつづける力であって、前から私を引っ張る力ではない。すなわち、私に何かをするように強要するが、しかしそれは私に何をなすべきかを指示しない力である。それは盲目的なエネルギーにほかならない。それは言わば「非合理的」なものである。

ともあれ、この力に押されている限り、私は何かをしなければならぬ。では何をなすべきか。盲目的な力に対応するためであるから、私は何をやっても良いのである。言わば私は「無限の可能性」をもっている(図5)。

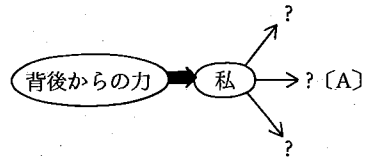


図5.

だが、私は無限の可能性の中から何か一つを選択しなければならないのである。そこでである事柄Aを選択して、これを定立することにしよう(図5)。それによって背後からの力は水路を見出し、Aへ流れ込むであろう。

背後からの力が一つの水路の中を勢よく流れている限り、ひとは生き生きと生きることができる。彼の生は充実して、彼は生の喜びを味わうことができるのである。

だが、定立された水路Aが有限であるなら、背後からのエネルギーは停滞し、そしてA内部で圧力が上昇する。この時、それは退屈という感情によって表現されるであろう。

そこで背後からの力は水路Aから溢れ出す。Aは乗り越えられ、否定されてしまう。

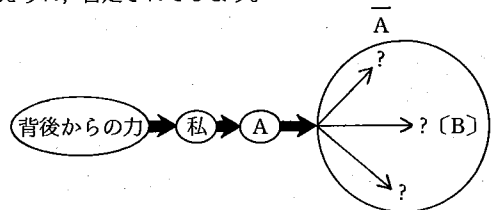


図6.

Aが乗り越えられ、そして否定された時、私はAという無限の可能性に直面して、さらにもう一つの水路Bを定立せざるをえないのである(図6)。こうして「生き生きとした生」が復活するわけである。だが、やがてこのBも乗り越えられ、否定されて、Bの中からCが定立されることになるだろう。以下同様である。

このようにして背後からの力は現実存在する事象を否定し、乗り越えて行く。それは反復とマンネリズムを嫌う。なぜなら反復とマンネリズムは背後からの力の流れを阻害するからである。

従って背後からの力は「創造的」であるように見える。だが、それがcreativeであるのは、乗り越えられるべきものを定立せんがためである。背後からの力は無を乗り越えるわけには行かない。不定なるものを否定するわけには行かない。それが乗り越え、否定できるのは現実に定立されたものだけである。故に背後からの力は言わば「ニヒル」である。nihilismであると言えよう。

このようなニヒリズムは人間の現象の到る所で見られる。例えば、欲望において私たちはすぐに退屈と倦怠を覚える。カレー・ライスの好きな子供でも、二日つづけてカレー・ライスを要求することはない。ドン・ファンが同じ女性に永続的な恋を捧げることはありえない。スポーツマンにとって記録は破られるために作られるのである。芸術家にとってオリジナリティは創作活動の生命である。

背後からの力をまるで「絵に描いた」ようなマンガがある。それはアメリカ人の愛読するピーナツ・ブックである。作者のシュルツはこの中で「スノーピー」という名のビーグル犬を登場させているが、これは全く奇妙な子犬である。

スノーピーは呟く、「Sometimes I think I'd like to be almost anything but a dog.」⁷⁾。そして次々に自分を小鳥やゴリラやトラ、サケ、ピラニヤ、ヒョウ、ライオン、ハゲタカに見立てて、そのように振舞う。そして遂にチャーリー・ブラウンをして「I think that dog is losing his mind.」⁸⁾とあきれさせている。

スノーピーの自己喪失は私たちの自己喪失に等しい。「内なる神」の節で述べたように、私たちは「現実の私」を失って「観念の自己」を求めているからである。

背後からの力は私の行為の対象を限りなく乗り越え、否定するだけではない。それはどうやら私自身をも乗り越え、否定するものらしい。背後からの力によって私は自ら私自身を否定する。従って私はもはや現実のこの私自身ではない。私とは現実の私以外のものであるという意識が生まれる。

スノーピーが「犬以外の何物か」になりたいと願うように、私もまた「私以外の何物か」になりたいと願う。

そして私が「人間という可死なるもの以外の何物か」になりたいと切望する時、例の内なる神が誕生するのではないだろうか。

だが、これは空虚なプライドにすぎない。背後からの力がこの私を乗り越え、そして私を否定する時、それは私の観念においては私を神にするが、しかし現実においては私に死を与えるのである。背後からの力は死によって私を否定し、子供という新しい個体の誕生によってこの私でないものを定立するわけである。このように解釈するなら、第2節で取り扱った「死のプログラム」も背後からの力による乗り越え・否定の方法として理解できるのである。

では、この力は一体何であろうか。私にはそれが「生命」と呼ばれているものと同じであるように思えるのである。

かねてから私は生物の種がどうしてあれほど多種多様でありうるのか、不思議に感じている。一体生物の種はどれだけの数になるのか、私には分からない。百万という桁の上にいるのではないだろうか。私にとっては生物の進化よりも分化のほうが印象的なのである。

分子遺伝学を踏まえた今日の進化論では、進化には一定の方向があるのではなく、遺伝子は極めて多様な方向に高い頻度で任意の変異を惹き起こすという説が主流となっているらしい。

もし生命の本性が背後からの力であるなら、進化には一定の方向が見られないということは背後からの力が盲目的なエネルギーであるということと一致する。さらに種の多様化は背後からの力の乗り越えとも一致する。すなわち背後からの力は「死のプログラム」によって個体を乗り越えるだけでなく、「進化」によって種をも乗り越えていることになるからである。

注

- (1) 松原治郎「地域生活環境論 社会学の立場から」(沼田真編著「環境科学の方法と体系」, 環境情報科学センター, 1975年, 所収, 117頁)
- (2) 石原健二「あとがき」(沼田, 上掲書, 202頁)
- (3) 石原, *ibid.*
- (4) 大野忠夫「ヒト細胞の分裂能力は50回」(「科学朝日」, 1982年1月, 57頁)
- (5) 大野, *ibid.*
- (6) フォイエルバッハ「キリスト教の本質(上)」, 岩波文庫, 1969年, 67頁
- (7) シュルツ「いじわるルーシー」, TSURU/PEANUTS Books, 11巻, TSURU COMIC, 1972年
- (8) シュルツ「さびしがりやのチャーリー・ブラウン」上記19巻, 16頁